

# コスプレ

**コスプレ**とはアニメやゲームなどの登場人物やキャラクターに扮する行為を指す。それらのジャンルの愛好者や同人サークルが集まるコミックマーケット、同人誌即売会を始めとする各種イベント、また、ビジュアル系バンドのライブ会場等で見かけられる。コスプレを行う人を**コスプレイヤー** (*cosplayer*) と呼ぶ。

コスプレは**コスチューム・プレイ**を語源とする和製英語だが、世界中で通用する単語であり<sup>[1]</sup>、英語表記の **cosplay** は、イギリスの辞書に載っている英単語である<sup>[2]</sup>。

近年は意味が拡大し、特定の職業で採用されている制服や特定の着衣を好む者が、その衣装を真似て作った服もしくは本物を着て、自らの意志でそのキャラクターになりきることもコスプレと呼ぶことがある<sup>[3]</sup>。しかし、狭義のコスプレに限るべしとの意見もある<sup>[4]</sup>。

## 歴史的な展開

### コスプレの起こり

日本では、江戸時代に流行した集団参詣や民衆踊りの際に仮装を伴うものが多く見られた<sup>[5]</sup>。また、江戸時代の京都では、人気芸妓が歴史上の人物や物語の登場人物に扮して祇園などを練り歩き、途中で馴染み客から「所望!」という呼び声が掛かると、立ち止まって役にちなんだ舞を披露する「ねりもの」と呼ばれる仮装行列があり<sup>[6]</sup>、現在のコスプレ写真のように、個々の仮装姿が浮世絵に描かれ人気を集めた<sup>[7]</sup>。古くからハロウィンで仮装する伝統があるアメリカでは、1960年代後半からSF大会等のイベントにおいて、『スタートレック』等のSF作品に登場する人物の仮装大会 (*masquerade*) を行なっていた<sup>[8]</sup>。日本においてもアメリカで主に開かれる世界SF大会ワールドコンの影響を強く受けた日本SF大会で1960年代末から1970年代に既にコスチューム・ショーとしてプログラムの中に取り入れられていた<sup>[9][10]</sup>。日本SF大会におけるコスプレは、1974年の京都大会からショウアップが行なわれて、翌年から定着したという<sup>[9]</sup>。1978年に神奈川県芦ノ湖で開催された第17回日本SF大会の仮装パーティーに於いて、当時はファンの一人だったSF評論家の小谷真理やひかわ玲子らで構成されたファンタジーサークル「ローレリアス」が、エドガー・ライス・バローズの『火星の秘密兵器』（創元SF文庫）の表紙イラスト（武部本一郎によるもの）を真似た格好で参加<sup>[11]</sup>。他の参加者がその姿を見てアニメ『海のトリトン』の仮装だと勘違いし、本人も強く否定しなかったことから、いつの間にかトリトンが日本のコスプレ第1号と言われるようになったとされる。その後も日本SF大会ではコスプレのコンテストが行なわれた<sup>[12]</sup>。

この「架空の人物に扮する」という行為は、活字での SF ファンが多勢を占めていた当時において特異な存在であり、ともすれば異端と見做され「SF ファン」とは一線を画す、少数の限られた嗜好であった。しかし、SF に対して何かしら一見識がないと参加し辛く、ハードルの高かった SF のコミュニティーで、単に「参加してみたかっただけ」というライトな SF 層も「仮装」という見た目がわかりやすい形での参加が可能になり、それまで「覗き見」だけだった者 からも取り込んでいくことになる<sup>[13]</sup>。

同人誌の即売会等でもコスプレは行なわれており、単にアニメの仮装と呼ばれていたマンガやアニメの扮装をすることをコスチュームプレイと呼ぶようになったのは、同人誌即売会コミックマーケット（コミケット、コミケ）代表者の米澤嘉博を中心したメンバーだった<sup>[14]</sup>。米澤は、元は少女マンガの同人作家やファンがコミケをお祭りの場として派手な格好をしていた中から、アニメのキャラクターの扮装をする者が現われ、徐々に増えていったとしている<sup>[15]</sup>。アニメやマンガのコスプレが登場する以前のコミケでは、自分が愛好するロック系の衣装を身につける事も行われていたが、1977 年になってコミケにアニメ『海のトリトン』の衣装をした少女が登場して注目を集め、その次の回には『科学忍者隊ガッチャマン』のコスプレが登場し、徐々に広まっていった<sup>[9]</sup>。

日本のメディアではアニメ雑誌等が同人誌即売会に関連してコスプレを少しずつ取り上げ始めたが、特に大きく取り扱ったのは、ラポート発行の『ファンロード』1980 年 8 月号（創刊号）で、同誌は、当時原宿を席卷していたタケノコ族を振り、原宿にコスプレ集団「トミノコ族」が現われたとする「特集記事」を掲載した。「トミノコ」は『機動戦士ガンダム』の富野由悠季監督に由来するもので、記事には『機動戦士ガンダム』の登場人物やモビルスーツ・ガンダムの仮装をした人々が踊っている写真が掲載された。実際には、当時そのような風俗は存在せず、これは報道記事の体裁を採った映画宣伝企画だった<sup>[9]</sup>。

1985 年になると、TBS がテレビ番組でコミケを取材して、多くのコスプレイヤーに取材を行なった<sup>[9]</sup>。テレビでは 1989 年になって、テレビ番組『はなきんデータランド』（テレビ朝日系、1989 年 - 1995 年）が、アニメランキング特集を行った際にコスプレランキングも発表していた。

1985 年頃には、同人誌界で人気だった『キャプテン翼』のコスプレが、T シャツの改造やユニフォームショップに注文するだけの手軽さから拡大する。1986 年からは集団で行なうコスプレが発生したと言われ、同時期にはコスプレを撮影するアマチュアのカメラ小僧と言われる人々が現れる<sup>[16]</sup>。

一方、1988 年頃から、同人誌即売会でのコスプレは混雑やマナー、過度な露出などの問題から、禁止とするイベントも増えていった<sup>[9]</sup>。

アメリカでは、1970 年代後半に SF 映画『スター・ウォーズ』の人気によりコスプレはポピュラーとなり、日本のアニメ人気によりアメリカ全土で行な

われるようになったアニメコンベンションなどのイベントでは日本の漫画やアニメのキャラクターに扮する光景が見られるようになっている。そこでは従来の masquerade ではなく、和製英語由来の cosplay の名称で呼ばれている<sup>[17]</sup>。

## 1990年代での発展

1990年代にコスプレの人口は増大し、コミケのコスプレイヤーは1991年には約200人、1994年に約6000人、1997年には約8000人を数えた<sup>[9]</sup>。

アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』の流行等でサブカルチャーに注目が集まるようになり、コスプレという用語・行為も普及した。1990年代初頭のビジュアル系バンドブームの火付け役となるX JAPANのライブではファンによる凝ったコスプレが披露され、これは2007年の復活後にも少数ながら見られた。

その頃から商業資本もコスプレに着目するようになった。従来、コスプレ衣装はコスプレイヤーによる自家製によるものしかなかったが、それらを既製服として製作・販売する業者「コスチュームパラダイス」（現・コスパ）が現れた。これは製作者の技術に出来が左右される自家製の物に対して、一定レベル以上の品質を保っていたために人気を集め、ブランドを確立している。コスパの成功以後、こうしたコスプレ衣装製作業社が増えた事で市場は拡大していった。

イベントについても、それまではコミックマーケットを始めとする同人誌即売会や、ワンダーフェスティバル、日本SF大会等において付随的に行われていた状態から、コスプレ単独のイベントも開催されるようになった。形式としては、コスプレをしてダンスミュージックやアニメソングに合わせて踊る「コスプレダンスパーティーや、コスプレイヤー同士が互いに交流や撮影を行ったり、アマチュアカメラマン（カメラ小僧）に撮影の場を提供する撮影会などがある。

イベント会場は、東京ファッションタウン（TFTホール）や大田区産業プラザ（Pio）といった各種展示会場等が使われるが、ダンスパーティー形式ではディスコやクラブ等が使われる事もある。また、後樂園ゆうえんち（現東京ドームシティアトラクションズ）がハロウィンの仮装イベントとして始めたコスプレイベントが切っ掛けとなって、各種遊園地やテーマパークでもイベントが行われるようになった。これとは別に、「東京ゲームショウ」や「キャラフェス」、「DreamParty」等といったコスプレが可能な展示会等の各種イベントも開催されるようになっている。「コスチュームカフェ」と呼ばれる制服専門の同人誌即売会・コスプレイベントや、特定のジャンルのコスプレに限定したイベントも開催される。

同人誌即売会やコスプレイベント情報を集めた情報誌が同人誌として発売され、インターネットの普及以後は情報サイトも登場した。コスプレ専門のムック・雑誌も発行され<sup>[18]</sup>、2007年現在では『COSMODE』（インフォレスト）、『電撃Layers』（メディアワークス）、『CosCure』（livedoor Cure・双葉社）ほか多数存在する。

## 広がりを見せるコスプレ

1990年代末以降になると、店員がコスプレ衣装を着用してサービスを提供するコスプレ系飲食店や風俗店が登場し、女優がアニメやゲームキャラの衣装を着用して登場するアダルトビデオ等も販売され、キャットファイトDVDでもメイドやレースクイーン、その他制服物衣装が着用されるようになった。

1990年代末 - 2000年代以降になると、インターネットの普及でコスプレイヤー各自がホームページを作成するようになり、ネットアイドル的要素を包含するようになる。さらには自主制作・同人レベルでコスプレ写真集やCD-ROM写真集を作成、同人誌や同人ソフトとしてコミックマーケット等で直接、もしくは同人誌専門店を通じて頒布するコスプレイヤーやカメラマンも出るようになった。

撮影の場は各種イベントだけではなく、コスプレイヤーやカメラマンが自主的に主催する個人撮影会、イベント会社やモデル事務所がコスプレイヤーと契約する形で、写真撮影会が行われる事もある。秋葉原の歩行者天国でコスプレ系飲食店や各種ゲーム等の宣伝活動を行っている店員やコスプレイヤーを撮影する事例もある。

アニメやゲーム等の宣伝要員として、人気のあるコスプレイヤーを「公式コスプレイヤー」として起用する例や、もとは無名でも、公式コスプレイヤーになった事で知名度を高めた例もある。公式HPのコンテンツとして、コスプレ衣装の紹介と通信販売へのリンクを貼る例もある。

中には芸能事務所に所属し、タレントや俳優（AV女優含む）、イベントコンパニオンやレースクイーン、キャンペーンガール、ファッションモデルを始めとするモデル業、声優等として活動する者おり、アイドルやタレント、声優等がイベントやプロモーション、グラビア写真上でコスプレをする事例もあり、コスプレが趣味であることを公言する者も居る。

2003年からはテレビ愛知（テレビ東京系）が主催となって、名古屋市内を会場とし、世界各地の著名なコスプレイヤーを日本に招いて「世界コスプレサミット」を開催するようになった。コスプレサミットは2005年は名古屋市内だけではなく愛・地球博会場でも行われ、ネット関連でライブドア（世界最大のコスプレコミュニティサイト「Cure」を傘下に持つ）の協力を得ており、2006年は大須夏まつりにて開催され、外務省・国土交通省の後援を得る

など、年を追う毎に大規模化している。2005年は欧米と中国の6国で、2006年には更にタイやブラジルでも予選が行われている。

2007年8月には衣装製作会社などが非営利法人「日本コスチューム協会」の設立準備委員会を発足、参加企業を募った上で、年内に正式に協会を発足すると発表した。同協会では日本のコスチューム文化の啓蒙や健全な発展を目的とし、定期的なイベントやコンテストの開催、SNSサイトなどを通じてのコスプレイヤーやコスプレファンの情報交換の場の提供、コスチューム製品の品質維持・消費者保護体制の確立・市場統計調査、PR活動・認知活動などを行っていくとしている。

## 日本のコスプレに関する禁則

風紀的な問題などから、会場や主催者によっては極端に肌を露出する衣装や男装・女装を禁止し、コミックマーケットなどでは、防犯・安全上の理由からモデルガン、模造刀、鋭利な装飾や棒<sup>[19]</sup>を始めとする全長の長い物などの持込が禁止されている。コミックマーケットの規則に準ずるとするイベントもある。コスプレをしたままでの来場・帰宅、更衣室と指定されていない場所での着替えやメイク、イベントによっては血糊の使用も禁止事項やマナー違反とされる<sup>[20][21]</sup>。また、盗撮や肖像権侵害を防ぐ意味から、開催当日もしくは事前申込という形で参加登録を義務付けるイベントがあるほか、主催者によっては特殊なカメラやレンズ、撮影機材に制限を設ける場合もある<sup>[20][21]</sup>。

さらに、コミックマーケットにおけるコスプレそのものを規制する検討もなされている<sup>[要出典]</sup>。

その他、屋外型博物館である博物館明治村において行われた行為が問題となり、規制に発展した例もある<sup>[22]</sup>。

## 法律との関わり

創作性のある表現にあたる独特な衣装は著作権法による保護の対象になるが、私的使用の範囲内であれば複製権ないし翻案権の制限により、権利者に無断で使用することができる<sup>[23]</sup>。また、商業上の行為を目的として権利者の許諾を得ることなくコスプレ衣装等を製作する場合、商標法や不正競争防止法に抵触することも考えられる<sup>[23]</sup>。軍服ないしは自衛隊の制服などについて軽犯罪法第一条十五項違反になるとして禁止するイベントもある。

## 世界各国でのコスプレ

欧米諸国を始め、東アジア諸国では韓国、中国、台湾、香港、東南アジア諸国等でコスプレを行なう層が増えている。

世界コスプレサミットなどにおける各国での予選会場の中には、日本人から見ると想像もつかないほどの盛り上がりとなっているところもある<sup>[24]</sup>。それには、日本人のコスプレに対するイメージが「オタクがやるもの」に対して、世界各国のコスプレに対するイメージが「何かになりきってみんなで騒ぐのは最高」という、コスプレに対するイメージの違いが大きいとする意見がある<sup>[25]</sup>。

欧米では「日本発の新たな文化」と見られるが、流血等の表現が問題視されることもある。また、発祥が日本という事で、他国の異文化に対する差別思想の対象となることもある。各種のアニメコンベンションではアメリカン・コミックスや『スター・トレック』、『スター・ウォーズ』のような自国の作品のみならず、日本発祥の作品のコスプレも行なわれる。こうしたコンベンションでは扮装を行うだけでなく、「マスカレード」と呼ばれる寸劇によるコスプレコンテストも実施される。イタリアの古都ルッカにおいても、1966年に始まったヨーロッパ最古の「ルッカ・マンガ&ゲームフェスティバル (it:Lucca Comics & Games)」でコスプレが行われている<sup>[26]</sup>。

中国では、日本の漫画やアニメを愛好する者によるコスプレ(角色扮演)が行われる。中国政府は危機意識やビジネスチャンスなどを踏まえた上で、国家事業としてコスプレイベントの全国大会である角色扮演嘉年華(コスプレカーニバル)を毎年主催している[1]。中国には様々な題材で仮装して劇を行う文化があり、角色扮演は同好会を作って数人でキャラクターに扮し、寸劇を行うことを意味している。台湾や韓国等でも同人誌即売会やイベントが開催され、日本作品のコスプレも行われている。

## コスプレの分類

「キャラクターになりきることを目的としているため、漫画、アニメ、ゲーム他の分類とコスプレの分類も一致する。「見せる為のコスプレ」という側面から派生した物もある。特定の職種や固有の制服を有する団体・企業のコスプレも見られる。

## 漫画・アニメ・ゲーム系

各作品の登場人物の衣装や持ち物を個別に再現した物がコスチュームとして製作されるほか、特定のキャラクターの衣装ではなく、登場人物の通う学校や所属する組織の制服を再現した物も存在する。

- 魔法少女
- アイドル（ラブライブ!、アイカツ!、うたの☆プリンスさまっ♪など）
- SF
- 漫画
- ゲームキャラクター
- 歴史系（真・三國無双シリーズ、戦国無双シリーズ、戦国 BASARA シリーズなど）
- 特撮ヒーロー
- ディズニーキャラクター
- スタジオジブリキャラクター
- ライトノベル

## その他

- 映画・ドラマ
- 歴史・時代劇（三国志など）
- 甲冑
- 芸能系
  - ヴィジュアル系バンド
  - アイドル（ハロプロ系、AKB48 グループ系、ジャニーズ系など）
  - お笑い芸人
  - 声優
- VOCALOID
- 自宅警備隊 N.E.E.T.
- 擬人化
  - 着ぐるみなどを用いず、ロボットや動物のキャラクターをイメージしたコスチュームを着用したもの。猫耳など
  - 鉄道擬人化 京急たん、ファステックたん、千九百王女（香港九鉄 SP1900 形電車）など
- ドーラー（Doller）

アニメキャラを模した仮面とコスプレ衣装を着用したもの

- 着ぐるみ

ロボットや動物系キャラクターなどの着ぐるみを装着、もしくは特撮ヒーローのスーツを着用したもの

## 参考文献

- 篠宮亜紀「二十分で分かる!コスプレの超常識」『別冊宝島 358 私をコミケにつれてって!』宝島社、1998年。

- 堀淵清治『萌えるアメリカ 米国人はいかにして MANGA を読むようになったか』日経 BP 社、2006 年。
- 三田村 落子 『コスプレ -なぜ、日本人は制服が好きなのか』 祥伝社新書、2008 年 10 月 5 日。
- 櫻井孝昌 『世界カワイイ革命 なぜ彼女たちは「日本人になりたい」と叫ぶのか』 PHP 新書、2009 年 11 月 30 日。ISBN 978-4-569-77535-7。

## 出典・脚注

[ヘルプ]

1. ^ 大辞泉 第 2 版【コスプレ】項
2. ^ Concise Oxford English Dictionary2008 年版には"cosplay"が収録された（参考:ウェブ版 oxforddictionaries-cosplay。「映画や本やテレビゲームの、特に日本の漫画やアニメのジャンルの登場人物として着飾ることの実践」と定義されている。
3. ^ 三田村(2008)、p.4。
4. ^ 櫻井(2009)、p.74。
5. ^ 江戸時代後期の砂持・流行踊りと庶民意識に関する研究国立情報学研究所、1994 年
6. ^ 祇園ねりもの田中緑紅 著 (郷土趣味社, 1936)
7. ^ ねりもの浮世絵検索
8. ^ 堀淵(2006)、p.234。
9. ^ *abcdefghijklmnop* 篠宮(1998)、p.56。
10. ^ 武田康廣『の一てんき通信 エヴァンゲリオンを創った男たち』ワニブックス、2002 年、p102.
11. ^ 同大会では小谷真理だけがコスプレをしたのではなく、後にガイナックス取締役となる武田康廣も SF 映画『スター・ウォーズ』のキャラクターに扮したことを自著で語っている（武田康廣『の一てんき通信 エヴァンゲリオンを創った男たち』ワニブックス、2002 年、p34）
12. ^ 1980 年の第 19 回日本 SF 大会では「コスチューム・コンテスト」と称するプログラムが行なわれた。『スーパーマン』『時をかける少女』『鉄腕アトム』『復活の日』などが登場した（小松左京『小松左京の SF セミナー』集英社・集英社文庫、1982 年、p31）
13. ^ 「おたくの起源」吉本たいまつ NTT 出版
14. ^ 篠宮(1998)、p55
15. ^ 「マンガ・アニメの解放区、コミケって何? 米沢嘉博氏インタビュー」『別冊宝島 358 私をコミケにつれてって!』宝島社、1998 年、p20
16. ^ みのうら「第十講 コスプレ史」『国際おたく大学 1998 年最前線からの研究報告』岡田斗司夫編著、光文社、1998 年、p228 - p232
17. ^ 堀淵 (2006)、pp233, 234
18. ^ 増田晶文「コスプレ・マニアックワールド」『別冊宝島 358 私をコミケにつれてって!』宝島社、1998 年
19. ^ 一部のイベントでは自撮り棒の使用を禁止しているところもある。



20. <sup>a</sup><sub>b</sub> コミックマーケット 79 ちぇんじ (コスプレの注意事項) 2011 年 2 月閲覧。
21. <sup>a</sup><sub>b</sub> Akaboo COMIC CITY,福岡 Yahoo! JAPAN ドーム会場注意事項例 2011 年 2 月閲覧
22. <sup>a</sup> コスプレなど衣装着用での撮影について 明治村公式サイト、2013 年 6 月閲覧
23. <sup>a</sup><sub>b</sub> “特撮ヒーローのコスプレをしても許される?”. リーガルセキュリティ倶楽部 (2010 年 10 月 6 日). 2013 年 6 月 28 日閲覧。
24. <sup>a</sup> 櫻井孝昌 (2009) p.77
25. <sup>a</sup> 櫻井孝昌 (2009) p.77
26. <sup>a</sup> 野田謙介. “ルッカ・マンガ&ゲームフェスティバル”. メディア芸術総合情報事務局 / 監修: 文化庁. 2013 年 6 月 1 日閲覧。